

審議会等の会議結果報告書

【担当課】 生涯学習課

会議の名称	令和7年度 第5回茅野市社会教育委員の会議		
開催日時	令和8年3月10日（金）午前10時00分～午前11時53分		
開催場所	茅野市役所 8階 大ホール		
出席者	矢崎智義委員（委員長）、竹内郁子委員（副委員長）、市川純章委員、島立幸男委員、宮坂章委員、矢崎知広委員 山田教育長、小池生涯学習部長、五味こども部長、矢嶋生涯学習課長、武居生涯学習係長、神近生涯学習係主任、木川中央公民館長、五味教育係長、伊藤図書館長、湯田坂文化財課長、柳川文化財係長、山科尖石縄文考古館係長、両角八ヶ岳総合博物館長、正木博物館係長、鵜飼神長官守矢史料館長、上条スポーツ健康課長、笠原スポーツ健康係長、両角こども課長		
欠席者	中村正幸委員、渡辺修委員		
公開・非公開の別	公開・非公開	傍聴者の数	0 人
議題及び会議結果			
発言者	協議内容・発言内容（概要）		
山田教育長	1 開会 2 教育長あいさつ 皆さんおはようございます。お忙しい中お集まりいただきありがとうございます。 先月、10月の終わりに岩手で第67回の全国社会教育研究大会が開かれまして、この場で前委員長の矢崎美智子さんが全国表彰を受けられました。本当におめでとうございます。 今回の岩手大会のテーマは『学びと絆で未来を切り拓く』で、サブテーマとして『共に学びを支え合う社会教育の実践、ウェルビーイングの実現に向けて』という内容でした。来年度の第68回は大阪で開催されるそうで、『未来につながる多様な人材の育成や資源の活用を目指して』というテーマが掲げられています。 ここ数年、社会教育や生涯学習、公民館活動などが停滞しているという声が多かったのですが、今年の大会では“これからの未来社会をどうつくるか”という前向きな方向へ大きく動き始めていると感じました。これは私たちが目指している方向とも重なると思います。 今日は議題が1番から3番までありますが、今お話ししたような未来づくりの視点を踏まえて、社会教育がどうあるべきか、社会教育委員として何をしていくべきか、皆さんに意見をいただければと思います。矢崎委員長からもお話があると思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。		

委員長	3 委員長あいさつ おはようございます。今日はお忙しい中ありがとうございます。私たちの任期は2年ですが、今日はその1年目の締めくくりになります。これまでの活動を振り返ってまとめるとともに、来年度をどう進めていくかについて意見交換したいと思います。活発に議論していただければと思います。 4 審議会の公開について 審議会の公開について事務局から説明。 本日の会議の公開、議事録の公開について説明及び確認を行い、非公開基準に該当する項目はないため、当会議を公開とします。議事録に関しては、委員名を表示せずにホームページで公開します。 (承認) 5 会議事項 (1) 令和7年度社会教育委員事業実施報告について (資料に基づき、事務局から説明を行う。) (意見なし) (2) 令和7年度茅野市社会教育に関する成果及び課題の状況について 資料に基づき、事務局から説明を行う。
委員	それぞれの立場で工夫しながら取り組んでいて、どの事業も内容が充実していると感じています。私はスポーツ協会に関わっているのでスポーツ健康課のことはよくわかるんですが、他の分野はなかなか理解しきれない部分もあります。それでも皆さん頑張って取り組んでいるなというのが、今のところの私の率直な意見です。
委員	学校にいと、子どもの視点や学校側の視点に偏りがちで、広い視野を持たなければいけないと、今のお話を聞いて改めて感じました。茅野市では社会教育に関わって本当に多岐にわたる取り組みをしていると実感しています。 うちの子どもが以前、尖石の史跡の発掘に参加したことがあり、とても面白かったようです。その経験から社会に興味を持つようになり、今では社会が好きになりました。今日、高校受験の日ですが、そういう“きっかけ”をいただけたことに親としても感謝しています。子どもって、こうしたチャンスから世界が広がるのだなと実感しました。 スポーツ公園の話も、私自身が10歳の頃に国体の応援に行ったことを思い出しながら聞いていましたが、改めていろんな場面でお世話になっているのだなと感じています。
委員	いろいろとご報告をいただいています、内容がとても多くて、正直すべ

	てを十分に理解しきれていない部分もあります。そのうえで、1点だけ確認したいことがあります。 市民館の運営見直しについて、先日私のところにも新しい組織体制の案内が届き、準備を進めているところです。これまでは指定管理者として民間に委託する形で運営していたと思いますが、今度は市長を中心に、市の職員が直接運営する体制に大きく転換するという理解でいます。 その説明の中に『会社組織の運営にそごをきたしていた』という、かなり厳しい表現がありました。この点について、詳しく教えていただきたいと思っています。
生涯学習課長	市民館の運営について、これまでと同じく指定管理者制度で、地域文化創造さんをお願いしている点は変わっていません。ただ、地域文化創造の社長が交代し、今井市長が社長に就任したという状況です。 その背景として、市民館は20年間運営していただいています。指定管理になってから、市の行政側が任せきりになってしまい、行政との連携が弱くなっていたという反省があります。そこで、市長が社長に就任することで、改めて市としての関わりを強めていこうという意図があります。 また、社員の皆さんは本当に一生懸命取り組んでいて、全国的にも評価が高いと聞いています。ただ、市民の要望に応えようと頑張りがすぎて負担が大きくなっていたり、後継の人材が育っていなかったりという課題もあります。こうした点にしっかり取り組んでいかなければならない、という状況です。
委員	運営組織そのものは大きく変わらない、という理解でよろしいでしょうか。
生涯学習課長	運営組織は変わっていないです。
委員	自主的な活動は今まで通り安定して続けられるということによろしいでしょうか。市の職員が入ると形骸化した活動になってしまうこともあるので、その点での自主性はこれまで通り保たれるという理解でよろしいでしょうか。
生涯学習課長	そうですね、そういう意味では今まで通りということです。ただ、これまで少し不足していた“経営的な視点”を強化するために、市長が社長に就任すると同時に、市の職員が退職派遣という形で専務理事に入り、その部分を強化していく体制になっています。
委員	中央公民館については、以前この社会教育委員の会議で説明を受けた際には、業務は変わらないが、関わる職員の担当が切り替わるという話でした。しかし、今回の資料には中央公民館の業務を市長部局へ移管すると書かれていて、説明と印象がかなり違うと感じました。その点を確認したところ、担当職員の所属が変わるだけで、公民館の位置付けは教育委員会のままという説明でしたが、このニュアンスをどう理解すればよいのか、お聞きしたいと

生涯学習課長	思います。 業務を市長部局へ移管しという表現は少し適切ではなかったかもしれませんが。これまで社会教育委員の会議でも説明してきた通り、公民館は市長部局に移る形になりますが、そこで市長部局の職員が教育委員会の仕事を行う“補助執行”という形になります。つまり、職員の所属は市長部局に変わりますが、公民館としての教育委員会の位置付けはそのままです。
委員	実際のところ、内部でどう運用がされてきたのか私たちには分からない部分もあります。ただ、私がイメージしているのは、公民館という組織としての存在は教育委員会にあるままで、その中で働くスタッフの身分や肩書きだけが市長部局に移る、という形です。 ただ、現場で見ている人からすると、市の職員が入ることで“建物管理まで市長部局に移ったのではないかと”受け取られてしまう可能性があるのではないかと考えています。説明を聞いていると、公民館そのものが市長部局に移ったように聞こえてしまうので、そこが懸念点です。 というのも、公民館活動は市民活動の一部ではありますが、あくまで学習の場であり、自治会などのまちづくりの実務とは役割が違います。自治の広い概念の中でつながりはあるにしても、公民館が住民自治の実務部門のように扱われてしまうと、本来の学習機能がぼやけてしまうのではないかと心配しています。 また、一体的な活動の支援という表現も、担当課の職員がパートナーシップと公民館に分かれていたものが同じ部屋になり、情報共有が進んでより良い企画ができる、という当初の説明とニュアンスが違って聞こえます。文章だけを見ると、単に業務効率化のために一本化したようにも受け取れてしまうので、その点も気になっています。 これまで議論してきたように、担当者が変わっても、公民館の理念や役割がぶれないように、どこかで“位置付けや活動の考え方”を明文化しておいた方が良いのではないかと感じています。 図書館についてですが、分館は図書館の一部であり、分館はこども館の運営と一体になっているという点が、別の会議でも話題になりました。こども館の運営を縮小・閉鎖していくという話が出ると、それはそのまま分館の縮小・閉鎖とイコールになるため、こども館運営事業だけの問題として扱えるものではないのではないか、という意見がありました。 図書館活動の中に位置付けられているとはいえ、実際には運営施設としてこども館と密接に結びついているため、その点を踏まえて考えていく必要がある、という認識です。 こども館の部分、特に青少年育成のところについてですが、資料に書かれている内容のニュアンスがよく分からなかったので確認したいと思います。 資料には今後の役割分担や再編はまだ途中段階であり、結論には達していない、委員会や団体の事業内容や課題について、市民団体と協力して地域の方から聞き取りができている、現状把握と課題整理を進めていく、と書かれていますが、これは具体的に何の話を指しているのでしょうか。 行政が行う施策としての政策の部分と、市民が自由に行う市民活動の部分

	は本来別のものだと思っています。しかし、この文章を読むと、市民活動の役割や目的まで行政側で整理するようにも受け取れてしまい、そこがよく分からない点です。ここは表現を見直した方が良いのではないかと感じました。 また、重複する部分の効率化を図りという表現も、市民との協力の話なのか、庁内の話なのか分かりにくいです。さらに、その下の項目にある役割分担や再編はまだ途中段階という点についても、具体的にどういう再編を検討しているのか、市民側の話も含まれているのか、行政内部の話なのか、そのあたりが曖昧に感じました。 こども館と分館図書館の関係もそうですが、市民活動と行政施策の境界が曖昧なまま整理されると、意図しない誤解が生まれる可能性があると思います。ですので、この部分については、もう少し説明をいただければと思います。
生涯学習課長	先日、市議会で木村かほり議員から組織統合について一般質問があり、その際にもお答えしたところですが、今回の組織はまず一つにしたという段階であって、すべてが整った状態で統合されたわけではありません。今後の仕組みづくりについては、社会教育委員の皆さまからのご意見をいただきながら組み立てていく考えです。 図書館の分室については、行財政改革の中でも課題となっています。ただ、分室はこども館との一体運営になっているため、こども課と密に連携し、地域の声も聞きながら進めていく必要があると考えています。
委員	要するに、公民館について担当者の所属が変わっただけで、その他の部分はまだ決まっていないという理解です。今後、詰めていく中で、きちんとした形が作られていけば良いと思います。 それから、青少年教育に関わる事業の整理について、役割や目的の整理、役割分担や再編成と書かれていますが、具体的にどの部分を想定しているのかをお聞きしたいです。行政施策としての部分と、市民の自由な活動の部分がある中で、市民活動まで整理の対象になるようにも読めてしまうため、その点を確認したいと思います。
こども課長	青少年教育のところですが、子どもの数が減っている中で、地域の育成会の活動もコロナで一時期弱まったことを踏まえ、体験活動やイベントが本当に必要なのか、もし事業をやめたらどうなるのか、といった事業の目的そのものを整理している段階です。必要性を一度立ち止まって見直している、ということです。
委員	青少年教育のところですが、資料の書き方だと市が行う施策の整理なのか、地域が行っている活動の整理なのか、その境界があいまいに読めてしまいます。行政側の話なのか、市民側の話も含んでいるのか分かりにくいので、その点を確認したいという質問です。
こども部長	青少年教育について補足します。行政が主体で行っている事業は実は多く

委員	なく、こども会育成会など地域の団体が中心で、市は協力する形が多い状況です。ただ、本来は教育委員会として主体的に取り組むべき内容でもあるため、行政として行うこと、茅子連や育成会が行っていることを一度整理し、それぞれの役割分担を明確にしたいという意図で書いたものです。行政は行政、民間は民間として整理しながら活動していきたい、という趣旨です。 なるほど、両方含んでいるということですね。分かりました。実は以前から気になっていて、自分の地域でも聞いてみたのですが、こども館の冊子にあるこども会育成会支援事業の中の研修について、各地区の育成会に聞いても研修は特になく、行事をやると市から5千円の補助金が出るだけ、という実態でした。つまり、連携して取り組むという形自体が、実際には変わってきているのではないかと感じています。こども会という存在自体も曖昧になってきており、その役割分担や教育のあり方も含めて整理が必要なのではないかと思いました。 もう一点、子どもの声を聞き、施策へ反映するまちづくりという表現についてですが、意図と違う受け取られ方をされる可能性があると感じています。反映させることが社会の責務と書くと、子どもの声を反映させること自体が目的になり、例えば、今年は何件反映できたかという数値目標のように扱われてしまう恐れがあります。本来は、アンケートで聞いて終わりではなく、ワークショップなどを通して考えるプロセスが教育的に重要だと思うので、目的と手段が入れ替わらないような表現が必要ではないかと感じました。 最後に、総合博物館についてです。茅野市の郷土史や産業史、特に近代史をどこで学べるのかを考えたとき、郷土資料館のような展示が現在あるのかが気になっています。図書館に資料があると思いますが、視覚的に茅野市がどのように形作られてきたかを学べる展示があるのか、現状を知りたいと思っています。八ヶ岳の自然史の展示はありますが、近代史や産業史、小学校の変遷や寺子屋など、地域の営みが分かる展示が強化されると良いと感じています。現状どうなっているのでしょうか。
生涯学習部長	十分なお答えになるか分かりませんが、来年度から茅野市史の続編となる、昭和後半以降～平成の歩みをまとめる作業に入る予定です。行政文書なども、このタイミングで整理しておかなければならないという考えがあり、準備を進めています。作業の中で残すべき資料が明確になってくるといいますので、公開できるものは図書館の郷土史コーナーなどで市民に見ていただけるようにしたいと考えています。 総合博物館にも多くの資料がありますが、物は置いてあるだけでは語らないので、学芸員が価値や意味を市民に伝えていくことが重要だと思っています。収蔵庫にも多くの史料があり、製造年代による変遷なども含め、体系的に伝えていく必要があります。 また、神長官守矢史料館には中世～近世の古文書が多く収蔵されています。今は収蔵庫的な位置付けですが、土地と古文書を結びつけて学べる学術センターのような方向を目指していきたいと考えています。 このように、点在する施設はそれぞれ役割が異なりますが、茅野市のまち

委員	づくりに活かせるよう、一体的に取り組んでいきたいと思っています。 総合博物館という形であれば、茅野市の歴史を広く扱えるのではないかと考えていましたが、テーマによっては規模的に収まりきらない部分もあるのだと感じました。私自身、旅行先で産業史館や郷土資料館をよく訪れますが、その地域がどんな必然や偶然で発展してきたのか、地形や川の流れ、田んぼの区分けなどを視覚的に理解できる展示がとても面白いと感じています。紙の資料だけでなく、そうした見て考えられる展示があると良いのではないかと思います。 総合博物館の市民研究員の取り組みは素晴らしいと思いますが、一方でこれは運営体制づくりの話でもあると感じています。今後、どんなテーマを扱っていくのか、展示の方向性や戦略のようなものがあると、より魅力的な施設になるのではないかと思います。
委員	どの部署でも地域の声をよりの確に把握して、まちづくりに生かしていきたいという思いが伝わってきました。今後、体制が変わっていく部分もあると思いますが、地域の声をどう受け止めていくかにはいろいろな方法があると思いますので、工夫しながら取り組んでいただければありがたいと感じています。
委員	新聞で博物館などの収蔵品を廃棄できるようにするという記事を見ました。収蔵庫がいっぱいになる問題は、図書館でも同じで、新しく入れた分だけ何かを出さなければならない状況になっています。こうした収蔵スペースの逼迫について、各館ではどのような対策を考えているのかお聞きしたいと思います。
尖石縄文考古館考古館係長	考古館としてお答えします。収蔵庫はかなりいっぱい状況です。大規模な発掘があった場合、今のままではとても収まりきらないというのが現状です。ただ、棚に収めている遺物の中には、復元しきれない土器片などが箱に入っていて、その箱にもまだ隙間があるものが多くあります。そうした部分を整理すれば、多少は収蔵スペースを確保できる見込みはあります。とはいえ、大量の遺物を受け入れられるほどの余裕はありませんので、もし大きな発掘が予定されていて多くの遺物が出るようであれば、別の対応を考えなければならない状況です。
八ヶ岳総合博物館長	博物館としてですが、収蔵品の廃棄については現時点では全く考えていません。今後も寄贈を受けながら、学芸員がどこに価値を見出すかという視点を高めていきたいと思っています。 収蔵庫は満杯の状態ではありますが、まずは現在ある資料を整理しながら収蔵スペースを確保していくつもりです。また、市の関連施設など、別の場所の活用についても検討していければと考えています。
文化財係長	守矢史料館についてですが、ここでは守矢家に関わる史料のみを収蔵しています。そのため、新たに収蔵品が増えることは基本的になく、収蔵スパー

	スが逼迫するような問題は生じていません。
図書館長	図書館についてですが、書庫は常に満杯の状態ですので、基準に則って日常的に除籍作業を進めています。除籍にあたっては、茅野市だけで判断するのではなく、6市町村の蔵書状況も確認し、どこかに一冊でも所蔵があれば、茅野市では除籍してもよいという考え方で運用しています。そうした形で、決められた基準に沿って整理を行っているところです。
生涯学習課長	茅野市美術館です。収蔵庫は現在およそ7割ほど埋まっている状況です。先日、美術品寄付審査委員会でも話題になりましたが、寄付の申し出は毎年あり、これをすべて受け入れていくと確実に満杯になってしまいます。そのため、寄付についてはすべて受けるのではなく、収蔵庫のキャパシティも踏まえながら、慎重に選んで受け入れていく必要があるという課題があります。
委員	寄贈についてですが、以前どこかの図書館を見学した際、絵画などの美術品を市民に貸し出すという取り組みをしているところがありました。寄贈品を収蔵庫に保管するだけでなく、民間に貸し出すという方法も一つの手ではないかと感じました。
委員	収蔵庫がいっぱいになる問題についてですが、ヨーロッパでは何を残し、何を捨てるかを判断する専門職、いわゆるアーカイバーやアーキビストが国として整備されています。日本はその仕組みが非常に弱いと言われており、自治体の担当者が個別に工夫して対応しているのが現状です。 特に公文書の保存については、本来何に保存価値があるのかを専門的に判断できる人材が必要で、捨てる・捨てないの判断も専門家が行うべきだと言われています。いずれ日本でも同じ課題が本格的に出てくると思いますので、茅野市だけで判断するのではなく、県や国に対して、こうした専門職の認定や制度整備を働きかけていくことも必要ではないかと感じました。
委員	(3) 社会教育についての意見交換、今後検討するテーマについて 社会教育の取り組みに向けた意見交換ということで、今後どう進めていくかを検討する段階に来ています。任期2年のうち半分が過ぎ、残り1年をどう進めるかということですが、これまで皆様からいただいた意見を一度整理してみようということで、A3の資料を配付しました。 細かく書かれた方の紙は、皆様の発言を議事録の元原稿から整理したものです。右側が発言者、その左が内容、その横に分類、さらに大分類という形で、発言のポイントを階層的に整理しています。裏面には、その発言を大きく2つにまとめたものがあります。1つは会の目的や進め方に関する意見、もう1つは社会教育・社会性・自治といった内容に関する意見です。つまり、方法論と中身の2種類に整理されました。 やり方・目的については、会の目的を検証と管理・計画と捉える意見、またテーマを決めて会議を進めてはどうかという意見がありました。行政側の準備や予算提示の必要性、他分野のやり方を参考にするという意見も多く出

委員	ています。 一方、現在の社会教育の課題としては社会性という言葉が多く挙がりました。学びを自治につなげる、個人から地域への還元、社会性を高める教育の必要性など、個人だけでなく地域とのつながりを重視する意見が多かったです。 一見すると会の進め方と社会性の議論は別の話に見えますが、実はそうではないということをお伝えしたいと思います。 もう1枚のA3資料は、茅野市の社会教育に関する計画体系をPDCAサイクルの観点から整理したものです。茅野市には基本計画として教育大綱と生涯学習推進指針があり、その下に実施計画として『社会教育推進計画』があります。推進指針には5つの分野があり、その中に社会教育推進計画が位置づけられています。さらにその下に、公民館・図書館・博物館・考古館・守矢史料館、そして地域づくり・人づくりの推進が並んでいます。 資料の赤字部分は、各計画の中で個人だけでなく社会性を重視している部分です。教育大綱でも人と人とのつながり、地域づくりが強調されていますし、生涯学習推進指針では知の循環社会の創造として、個人の学びを地域に循環させることが明確に示されています。つまり、皆様が問題意識として挙げている社会性は、すでに上位計画の段階でしっかり位置づけられているということです。にもかかわらず、現場で社会性が課題という声が出てくるのは、PDCAサイクルが十分に回っていないからではないかと考えています。推進計画には社会教育委員の会議の役割として進行管理が明記されており、計画の施策を検証し、推進に向けて協議することが求められています。しかし、今日の報告も事業の実施報告にとどまり、上位目標との照らし合わせまでは十分にできていません。 また、参考資料として紹介したリテラシー（個人の力）とコンピテンシー（社会とつながる力）のバランスの話も、皆様の問題意識と重なる部分が大きいと感じています。戦後の個人主義の流れの中で、個人の能力を重視する教育が進んできましたが、その結果として社会性が弱まり、地域とのつながりが希薄になってきたという背景があるのではないかと思います。 そこで、来年度の進め方について皆様にお伺いしたいと思います。 私たちの役割がPDCAを回すことであるなら、どのように検証を行うのか、どのような資料が必要なのか、行政側にどう準備してもらうのか。そして社会性についてどのように議論していくのか。あるいは、社会性以外に取り上げるべきテーマがあるのか。個人から地域へ、学びをどう循環させるかという視点も含めて、皆様のご意見をいただきたいと思います。 いろいろな部署から報告を受けましたが、部署ごとにそれぞれ課題や取り組むべきテーマを持っていると思います。ただ、それを一つひとつ社会教育委員会の場で議論していくのは現実的に難しく、実際には不可能に近いと感じています。ですから、各部署が抱える問題に取り組んでいくこと自体は必要だとしても、私たち委員会として何をしていけばいいのか、1年間参加してきた中でまだ結論が出ていません。 正直に言えば、これまでの社会教育委員の会議は何をしてきたのか、そこを逆に伺いたい気持ちがあります。もし、今日のような報告をただ繰り返し
----	---

生涯学習課長	てきただけであれば、結果も出ず、課題解決にもつながらない委員会になってしまっていたのではないかと感じています。これまで何を目的に、どんな成果を目指してやってきたのか、説明できる方がいればぜひお聞きしたいと思います。 そうした問題意識は、実は今年度の第1回目から話してきたところです。何をやってきたのか、社会教育委員の会議とは何のためにあるのか、そもそも社会教育とは何か、という根本的な問いに向き合っている最中です。 これまでの委員会は、今日の(1)のように各部署から報告を受け、委員から意見をいただくという形を繰り返してきました。しかし、それで本当に良いのかという疑問があり、今年度はそこを皆さんと一緒に考え直そうという方針で進めています。 その一環として、中川先生のお話を伺い、社会教育とは何かという根本の部分から考え直しているところです。正直、私自身も今まで何をしてきたのかという思いはありますし、だからこそ今年度はその問いに向き合う時間に行っている、という状況です。
委員	先日の市長部局への移管の議論のように、大きなテーマを据えて深く話し合うことはとても重要だと感じています。そうした議論から新しい疑問や視点も生まれますし、委員会としての役割も見えてきます。 今後は、何か一つこれをやるというテーマを決めて取り組むことが必要ではないかと思っています。各部署の課題を一つずつ扱うのは現実的ではありませんが、大きなテーマを設定して議論を深めていくことは、委員会として一つの正解ではないかと期待しています。先日の議論も良かったと思いますし、ぜひあの形で続けていってほしいと感じています。
委員	各部署の取り組み自体には問題はなく、皆さんベストを尽くしていると思います。ただ、その上位にある方向性や価値観としての理念が空白になっているのではないかと感じています。社会教育の課題として挙がっている社会性の問題も、結局は個人と社会の関係をどう捉えるかという理念の問題だと思います。 戦後の流れの中で個人を重視してきた結果、社会とのつながりが弱まり、しかし今は“個人が豊かに生きるためには豊かな社会が必要だ”という基本に立ち返る必要があるのではないかと感じています。社会を押し付けるのではなく、社会が弱ると結局は個人も生きづらくなる、という視点です。 もう一つ重要だと思うのは時間の貧困です。どれだけ場やコンテンツを整えても、そもそも人々に活動する時間がなければ参加できません。経済的には豊かでも、時間がない人が増えているのではないかと。総合計画でも生活時間の視点が十分に入っておらず、ここを見ないと施策が機能しないのではないかと感じています。 社会教育を考えるうえでも、理念の再整理と、時間の問題を含めた現実の生活条件を見直すことが必要ではないかと思っています。
委員	先生のお話を聞いて、個人が豊かに生きるためには豊かな社会が必要だと

委員	いう点に強く共感しました。学校現場でも優しい子どもを育てると言いますが、そもそも優しい社会とは何かを考えなければ、子どもだけに求めても成り立たないと感じています。 茅野市の各部署が動いていることを見ても、社会全体があたたかい構造になることが社会教育の意味なのではないかと思いました。学校としても“あたたかい学校”をつくることを考えていますが、それと同時に、社会全体のあり方を考えることが大切だと感じています。 スポーツ協会の会長として充て職で委員を務めていますが、文化系の分野はこれまであまり分からず、この委員会に入って初めて公民館や博物館、考古館などを見学し、勉強になりました。 ただ、スポーツの現場にいと本当に時間がなく、公民館の講座などに行きたいと思っても参加できないことが多いです。そうした中で、公民館や博物館の活動を審議してくださいと言われても、正直なところ自分には難しい部分があります。 各課の皆さんが頭を悩ませながら計画を作っていることはよく分かりましたが、例えば公民館なら公民館の運営審議会など、専門の場で検討してから、この委員会に上げてもらう方法もあるのではないかと思います。自分としては、すべての分野を十分に理解したうえで判断するのは難しいというのが率直な意見です。
委員	私自身、委員として活動する中で多くを学ばせていただきましたが、茅野市の社会教育委員としてどう進めていけばよいのかという点は、ずっと難しさを感じていました。 先生がおっしゃった時間の貧困という言葉についてですが、私には少し理解が難しいところがあります。時間の貧困とは、何かをやりたいと思っても時間がなくてできないという意味なのか、あるいは時間がないことで達成できないということなのか、そのあたりをもう少し教えていただきたいと思います。
委員	はい、そういうことです。つまり時間的余裕がないということです。PTAでも仕事が忙しくて行けないという声がよくありますが、背景には人口構造の変化や、親の介護、定年延長による長い就労などがあり、自由に使える時間がどんどん減っています。 自営業のように自分で時間を調整できる人も減り、社会全体として可処分時間を工面できる人が少なくなっているのが現状です。子どもの送り迎えなど地域特有の事情もあり、個人が自由に使える時間が奪われている。文化活動や役員活動に時間を割けないのは、やる気の問題ではなく時間の乏しさが原因だということです。これを時間の貧困と呼んでいます。
委員	若い世代にもこうした役を担ってほしいと思う一方で、現実には同じ人に負担が集中してしまう状況もあります。まずは個人が自分の時間をどう有意義に使うかという問題があり、それが大きな組織や地域活動につながっていくのだと思います。

委員	各部署にはそれぞれ課題があり、それを一つずつテーマとして扱うのは簡単ではありません。だからこそ、委員会として大きな一つの課題に集中して取り組むという進め方も良いのではないかと考えています。これは私個人の意見ですが、そのような形でテーマを決めて議論していく方法もあるのではないかと考えています。 今日は結論を出すつもりではありませんが、皆さまにお諮りしたいと思って資料を用意しました。これまでのご意見を整理すると、社会教育委員の会議の役割は検証と計画であるという点が見えてきます。では、それを具体的にどう進めていくのか。また、皆さまの意見に多く出てきた社会・社会性・地域・自治といった視点を、どのように委員会の議論に組み込んでいくのが課題になります。 今日はその問題提起をし、宿題としてこれから1年間どう進めていくかを委員の皆さま、そして職員の皆さまにも考えていただきたいと思います。行政評価の話なども関わってきますので、次回はその点も含めて、来年度の進め方について議論したいと思います。今日の資料を後ほど見返していただき、考えていただければと思います。よろしくお願いします。 ～午前11時53分 会議終了～
----	--